
何時かまた会いたいね 改訂版

御伽人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何時かまた会いたいね 改訂版

【Nコード】

N0558L

【作者名】

御伽人

【あらすじ】

女子高生の私は、退学する彼氏と別れるのを泣いている。そして、別れてから、親友と友人たちと遊びに行ったりしている。私は弁護士になるために、大学に猛勉強していた。そして、高校を卒業する。

『何時かまた会いたいね』

冷たい春の日。私は出逢ってしまった。三人目の彼氏と。二人とも自然に話すようになった。今まで感じたこともない奇妙な感覚で。

一緒に帰るようになってから、部活を辞めた。彼氏は深夜のコンビニにバイトをしていた。私は休日だけ、バイトの時間前に彼氏が住む場所で、話をしている。いつも、嬉しくて、淋しい感じもしていた。

雨が降らなくても、最高の晴れ渡る「夜空」を見ながら帰って行った。

そして、高校二年になり、私と同じような気持ちになったらしい。「たまには普通のデートでもするか」

バイトは早朝だけにして、遅刻をして学校に通っていた。

その時から、私の願いは結婚だった。

いつも、一緒にいる親友の亜衣が、友人の朋美たちと話しながら、学生生活は終わりになってきた。親友の亜衣が、

「私は一体どうすればいいのだ」そう悩みを打ち明けてくれたから「別に平和に過ごせばいいんじゃない」

そう言いながら暇な時は二人で『運命の時』でコーヒーを飲んでいいた。どんな種類の豆か分からないが美味しかった。

そして、プライベートも勉強に費やす事にした。メールをする時は休憩時間なんだなと思った。

私は猛烈に勉強しているから、少しコーヒーを飲む時間が減った。それが無かったとする。身体がこの生活に合って、ただ目標に向けて頑張ってきた。

きつと、最愛の恋人だと思っていた。その彼氏と別れ話をされた。家の事情らしい。私は叶わぬ願望を言った。

「何時かまた会いたいね」

「ああ。そのうち迎えに行くよ」

「結構楽しかった。別れは悲しいけど、学校を退学したらしようがないね」

「まあ、それなりに楽しめたし。体力には自信があるからさ。それに気性が少し荒いからさ。肉体労働に向いているんだと思う」

そうして、私は校内の視聴覚室でキスをした。何故か鍵が開いているからだ。壊したのは、彼氏だけだ。

ずっと、一緒にいようと言ってくれたのに。私は目頭が熱くなった。もう二度と逢えないから。だから、悲しかった。

「そう泣くなよ。大学行くんだらう？いい男が勢ぞろいしていると思っぞ」

「馬鹿。そんな軽くてやわな絆ではない」

「そうだな。短かったけど、よく付き合えたよ」

「私が、恋人が出来なかつたらアンタのせいだからね」

そうして、彼氏がいない高校生活はとて淋しかった。早く結婚したい。単なる結婚願望が宝石のように綺麗にある。それはもう宝物ではなくなった。

結構真面目の受験校を探している。そこで法律を学ぶ為であったからだ。将来は弁護士になりたかった。多分無謀だけでも。

今までの至高の想い出。それを休憩によく思い出す。

つい、最近のように思える。この眼が火照りそうな涙の想い。

青白い光の中で二人は絆を解けてしまい、私は人前で初めて泣いた。受験後には笑っていると約束をした。確認できない約束だけど。

こんな高校だと思っただが、エリートのない高校だから、遊びの

種類。授業のさぼり。友人たちとの雑談。すべてが綺麗だった。

受験はきつと受けると思えるようになった。一度や二度挫けても、いい方向へ。そう思っていた。きつと、新しい人が私を愛し、そして、いずれは弁護士。それが私の今のやりたい事である。

私はぎりぎりな所で成績が足りる。いつか、高校は単なる想い出から思い出になり、きつと好きな気持ちも風化してしまう。それが一番いい事だと思う。

そして、センター試験でも高得点を取った。満遍なく苦手科目がない。

朋美は歯科医師になるらしい。行きつけの『運命の時』でコーヒーを飲んでいる。

「私もベンツ乗りたいから」

不純な動機だ。朋美は飄々としている。いかなる時でも、話題を作るのも得意だし、彼氏もそれなりに好きだと言っていた。性格はある意味で素直だ。

「亜紀つてさ。意外に男を替えるよね。猫被っているのかな。私たちの前では」

「まあ。それでも、他人の事なんてどうでもいいよ」

「亜紀に言ってみよう」

「奢ってあげるから、『悪かった』と言ってくれないかな」

「いいよ」

そして、モスに行く事にした。珍しく三人でいけない。他に用事があるらしい。

そして、「また何時かまた会いたいね」と言ってきた。私も同じ気持ちだった。

亜紀はもうすぐ結婚するようだ。

「その時は、知らせるから、絶対来てよね」

「夫の不細工な顔を見るのも一興だし。別にいいよ」

朋美は？彼氏とデートかい？

「ベンツを買いに行っみたいだよ」

「そんなにお金持ちなの？」

「歯科医師の経営をしているみたいなの」

「たまには飯を奢れつてな。金持ちなんだから。その前に、ベンツ買う金が出来たら、私にくれ」

「無理に決まっているじゃん」

「あはは。つい願望が」

アイルランドみたいに淋しい空を見ていた。そして、ウエディングドレスを着た花嫁がやってきた。赤いバージンロードを夫と歩きながら、これからどうなるか分からない結婚生活。上手く行けばいいな。亜紀の未来が。どうせ、今の私には関係ないけど、大学に入ったら私も同じ道を歩みたいと願う。

そして、大学二年の春。女は忘れながら恋に堕ちる。例え大切な記憶があっても。

親友と友人たち。何より私を選ばなかった元彼を想った。今の関心は大学の友人たちではなくて、婚約者だと思っっている。それが私の今の全てだから。

弁護士の夢を諦めても、誰かと一緒に過ごしたかった。終わった彼氏の代わりじゃない。これから幸せを築いていく、夫の為に結婚式で泣いた。ただ自然に流れた。ただの幸せではない気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0558/>

何時かまた会いたいね 改訂版

2010年10月28日02時53分発行